問題一

次の(1)〜(10)の――線部の漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字になおして書きなさい。

(1) 駅までのショウ時間を調べる。
(2) 産業のハッテンを願う。
(3) 企業のギョウセキが悪化する。
(4) センモンの技術を学ぶ。
(5) 意見に対して反対をトナえる。
(6) 縦横むじんの大活躍だった。
(7) 台風で大きな被害が出た。
(8) 会釈して通り過ぎた。
(9) 墓前に花を供える。
(10) 易しい問題からとりかかる。

問題二

次の①〜⑤の各組の空欄には、同じ二字の言葉が入ります。その言葉をひらがなで答えなさい。

① 我を（　　）　値が（　　）　見栄を（　　）
② 目に（　　）　弱点を（　　）　鼻に（　　）
③ 興に（　　）　口車に（　　）　気が（　　）
④ あげ足を（　　）　音頭を（　　）　手玉に（　　）
⑤ あいづちを（　　）　先手を（　　）　胸を（　　）

問題三

次の①〜⑤のことわざの意味をA群のア〜オから選び、その記号で答えなさい。また①〜⑤のことわざのほぼ反対の意味のことわざをB群のカ〜コから選び、その記号で答えなさい。

① 立つ鳥あとをにごさず
② 虎穴にいらずんば虎子をえず
③ わたる世間に鬼はない
④ 鳶が鷹を生む
⑤ 下手の横好き

《A群》

ア 困ったときには助けてくれる人がいるものだということ
イ 立ち去るときは見苦しくないようにしておくこと
ウ うまくはないのに、そのことが好きで熱心におこなうこと
エ 危険をおかさないと成功をおさめられないこと
オ へいぼんな親から、すぐれた子どもが生まれること

《B群》

カ うりのつるになすびはならぬ
キ 人を見たらどろぼうと思え
ク 好きこそもののじょうずなれ
ケ 君子は危うきに近よらず
コ 後は野となれ山となれ

問題四

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（問題の都合で本文の一部を変えています）

立山勇（イサム）はミサエと一緒にすし屋を営んでいる。悠（ユウ）は勇の店に弟子入りして一年になる。店の客だった大室古堂は有名な陶芸家で人間国宝でもあり、勇の店「立山」の開店祝いとして古備前の壷（古い時代の壷で大変高価なもの）を贈ってくれた。大室桃治は古堂の息子で船舶会社の役員をしている。

失礼します、と悠は言って隣に座った。いつの間にかもの言いまで職人になっている。不器用な分だけいったん身につけば一生のものになるのだろう。胸の隅に喜びが湧いた。①言わずもがなと思っていた言葉がぽろりと零れてしまった。

「ユウ、一年よく頑張ったな……」

「は、はい」

悠が顔を赤らめた。

若い時に必要以上ほめることは、②その子にいらぬ了見を持たせることがある。イサムは悠を三年まではほめまいと決めていた。

「あら、忘れていたわ。そう言えばユウちゃんがここに来て、先月で一年になるのね。それはそれはご苦労様ね……。じゃあ今夜は三人でどこかで食事をしましょうよ」

「いや、明日は仕込が早い。ユウを河岸に連れて行く」

「えっ、そうなの」

酒は一本にして店の灯を消し、ドアに鍵をかけた。階段を下りはじめると、ミサエが素頓狂な声を出した。

「あら、いけない。私、花屋さんに渡す封筒を棚の脇に置いてきたわ」

自分が取ってきます、と言って悠が階段を駆け上がった。

二人は階段を下り、表に出て悠を待っていた。

五分が過ぎても、悠は下りてこなかった。

イサムは三階を見上げた。

もう十分は経っている。イサムは階段を上がった。ミサエも続いた。

ドアは開けっ放しになっていた。

「ユウ、どうしたんだ」

店の中を覗いたが、真っ暗で物音がしない。

かすかにすすり泣くような声がした。

灯りを点けると、カウンターの中に悠が立っていた。大粒の涙が頬から零れていた。

「どうしたっていうの、ユウちゃん」

ミサエがカウンターの中に入った。

ミサエの悲鳴がした。

悠の足元にこなごなになった古備前が散っていた。

「なんてことをしたの。これがどんなものかあんた知ってるんでしょう」

ミサエの言葉に、悠が、す、すみません、すみませんと言いながら泣いていた。

「これはあんたが一生働いたって買えるもんじゃないのよ」

ミサエが金切り声を上げた。

「ミサエ、静かにしろ」

③それまでミサエにかけたことがないほどの声が出ていた。ミサエは驚いてイサムを見返した。

「そこは職人の立つところだ。表に回れ」

④イサムはカウンターに入ると、悠の肩をそっと叩いた。足元にすのこがひっくり返っていた。灯りを点けずに入ったからすのこに足を掛けてしまったのだろう。

「ユウ、かけらを拾おうか」

イサムはそう言って悠としゃがみこんだ。

悠の肩が震えていた。

「職人は人前で泣くもんじゃない」

⑤悠の涙は止まらなかった。

昭和四十九年、四月九日、午後、富山県魚津市北中。

××第一小学校の掃除当番で立山勇十一歳は校長室前の廊下を掃いていた。

そこに当校の教頭が通りかかり、廊下の天井隅にクモが巣を張っているのを見つけ、立山少年に取り払うように言った。学校でも普段から口うるさいことで有名な教頭に命じられたので、少年は自分の背丈では届かない天井の巣をほうきを手に飛び跳ねながら取ろうとした。しかし巣のすべてが取れないので校長室から椅子を運び出し、その上に乗って巣を取ろうとした。ようやく巣がほうきの先に届きそうなとき、少年はバランスを失い椅子とともに廊下に転倒した。

大きな音がしたと同時に校長室から物音がして、物がこわれる音が続いた。転倒した少年が尻をさすりながら立ち上がると校長室から当番の女の子たちが廊下に出てきて、少年に、あなたが廊下で騒いでいたから中の花壺が台座から落ちたと言った。

少年は訳がわからず校長室に入った。

床にこなごなになった壷の破片が散っていた。女の子たちの顔が青ざめていた。

これはとても高価なもので校長先生が大切にしていたものだ、と言われた。

少年も始業式や卒業式で講堂に大きな桜の花を活けて飾るその壷の存在を見知っていた。

俺が壊したのか、と少年がきいたとき、足音がして担任教師と教頭が入ってきた。二人はこわれた壷を見て声を上げた。

こわしたのは少年だと女の子たちが言った。

「学校の大切な宝物を……。これがいったいいくらするものかわかっていますか」

教頭が激怒して言い、親を学校に呼ぶように担任教師に命じた。

家には耳の遠い祖母しかおらず、少年は母親が帰ってきても高価な花壷を弁償する金が家にはないのを知っていた。教頭は祖母と少年に花壷の値段までを口にしていた。

母の帰りを待つ間、行き場所のない少年は一人で海辺に出た。日は暮れて海鳴りだけが少年の耳に響いた。床に無残に散った花壷の破片に目を吊り上げた教頭の顔が重なり、嘆く母の顔があ

らわれた。少年は母が懸命に働いているのを知っていたから、なるたけ母に苦労をかけないようにしていた。空腹なときも我慢をした。その母がこのことを知ったらどんなに哀しむだろうかと思った。母の顔を見るに忍びなかった。少年はどうしていいのかわからなかった。目の前の海を見た。暗黒の海からは波音だけが聞こえていた。

⑥「死んでしまおうか……」

少年は生まれて初めてそう思った。

―― 中略 ――

母と少年は学校に行くとまず教頭と担任教師のところに呼ばれた。

教頭は母に卒業式の写真を見せ、そこに写っている花壷を指し示し、この作者が、郷土出身の陶芸家であると告げ、花壷がいかに高価なものかを説明した。

母は机に頭をすりつけるようにして懇願した。二人の教師は何も返答せず、ともかく校長に謝ってもらうのが先で、ほどなく校長が出張先から戻るはずだから待つように、と言った。少年は母と二人で校長室に入った。すぐに校長があらわれた。少年は校長の顔を見た。

―― 中略 ――

校長は少年の顔を見て笑った。

⑦少年は笑い返せなかった。校長の姿を見ると、母は床に土下座をし両手をついて言った。

「この度はこの子がとんでもないことをしてしもて（しまって）申し訳ありませんでした。どんだけ月日がかかっても、わしが必ず壷の代金をお返ししますから、どうぞ堪忍してくたはれ（ください）。どうぞこの子を学校に置いてやってくたはれ（ください）。頼みますちゃ」

少年も床に手をついて頭を下げた。

校長は床にしゃがんで額をこすりつけるようにしていた母の肩を抱き、やさしい声で言った。

「⑧お母さん、そんなふうにせんでください。この学校には子供がこわして困るようなものは何ひとつ置いてありません。ましてや値段がついている物はひとつもありません。さあ顔を上げてください。こんなことでわざわざ学校にお見え頂くことはありません」

少年は校長の顔を見た。

校長は少年の顔を見ると、あの柿の木の下で会ったときと同じように、顔をくしゃくしゃにして笑った。

少年の目から大粒の涙があふれ出した。

⑨桃治の屋敷に向かう坂道が見えた。

桃治のおだやかな顔が浮かんだ。

古備前がこわれた話を、その夜の数日後、桃治に電話で報せた。

⑩桃治は電話のむこうでしばらく沈黙していた。

「……そう、それは大変だったね。でも物はこわれるものだからね」

桃治は素っ気なく言った。

古備前はこなごなになってはいなかった。三分の一が割れて飛び散っていた。あの時は気が動

転してそう見えたのだろう。

「それで修理にだしてみたいのですが、私はそっちの方に疎うございまして、桃治さんに教えていただきたいのですが」

「そうなのかい。けどあれは贋作だよ」

「えっ？」

「だから贋作なんだって。おやじは贋作収集の名人だったからね」

「……そうなんですか。けれど古堂先生に頂いたものですから、修繕してどうにかなるものなら手元に残したいと思いまして」

「わかりました。ではしかるべきところを探して連絡しましょう」

電話を切ってからイサムは狐につままれたような気分になった。

そう言えば器を届けた桃治も、その価値を何ひとつ口にしなかった。客が勝手に値踏みをしただけである。⑪イサムは自分の迂闊さに思わず苦笑いをした。

修繕屋のほうから店にやってきて器を持ち帰った。一ヶ月かかって修繕は終わったが、代金は桃治の方から頂戴しているといって金を受け取ろうとしなかった。

その礼もあってイサムは今日、大室邸に挨拶に出かけた。

屋敷が見えた。門の前に人影があった。イサムに手を振っている。桃治と夫人である。イサムは立ち止まって一礼した。

⑫イサムは古備前の粗相を詫び、修繕の代金の支払いを申し出たが、桃治は笑うだけで相手にしてくれなかった。

彼は修繕を終えた器の写真を撮っておいたので、それを桃治に見せた。茶を運んできた夫人が興味ありげにその写真を覗いていた。

「いや上手いこと修繕をするものですね。驚きました」

「そうだね、骨董の修繕は日本の職人が世界でトップらしいからね。それでこれは親方がこわしたのかね」

いや、それが、と言いかけてイサムは言葉を飲み込み、頭を掻きながら言った。

「私と若衆が二人で落としてしまいまして」

それを聞いて桃治と夫人が顔を見合わせた。

「それはよございました。小僧さんがこわしたのでは大変でしたからね。『立山』さんの器は作造さん譲りでどれもいいものばかりですものね」

「いや、そんなことはありません。うちの店にあるものでお客さまと店の者がこわして困るものは何ひとつありませんから……」

イサムの言葉に二人が感心したようにうなずいた。

「いい心がけですね。私たちも見習わなくてはいけないわね、あなた」

（注1）贋作……すぐれた作品に似せた、にせもののこと。
（注2）迂闊……注意が足りないこと。うっかりすること。
（注3）粗相……不注意によるあやまちのこと。

夫人が桃治に言った。
桃治は笑って頭を掻いた。夫人が口元をおさえて笑っていた。
イサムはいとまを告げて、最後に今年の薮入りに若衆にスーツを買ってやりたいのだが、それを桃治に見立ててもらえないかと申し出た。桃治は快諾してくれた。
門前まで送ってもらい、イサムは何度か二人を振り返り、坂道を下った。
交差点で信号が赤になり、イサムはぼんやりと立っていた。上空で声がして見上げると、一羽の鳶が旋回していた。鳶から目を離すと春霞に包まれた東京の街が見渡せた。
――いい心がけですね。
夫人の言葉と笑顔がよみがえった。
彼女に店の器をほめられたこともうれしかった。店でもほとんど話をしない夫人が今日はよく話をしてくださったと思った。
そのとき、修繕の写真を興味ありげに覗いていた夫人の目が思い出された。
「それはよございました。小僧さんがこわしたのでは大変でしたからね」
耳の底で夫人の声がした。
――大変でしたからね……。
⑬春の風が一瞬、イサムの顔をたたいた気がした。
⑭「ひょっとしてあの古備前は……」
イサムはそう口にしてから目の玉を大きく開いた。

――伊集院　静『少年譜』

問一　――線部①「言わずもがなと思っていた言葉」について、次の問いに答えなさい。
(1)「言わずもがな」とありますが、それはどんな意味ですか。その意味としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。
ア　言うまでもない　　イ　言ってはならない　　ウ　言わないほうがいい
エ　言っても仕方がない
(2)また、「言わずもがなと思っていた言葉」とはどんな意味の言葉なのですか。文中よりぬき出し、「言葉」に続くように三字で答えなさい。

問二　――線部②「その子にいらぬ了見を持たせることがある」とありますが、「いらぬ了見」とはたとえばどんなことですか、その説明として**ふさわしくないもの**を次のア～エからひとつ選び、その記号で答えなさい。（了見……その人の考えや気持ちのこと）
ア　自分はもう一人前だと錯覚して地道な努力をしようとしなくなってしまうこと。
イ　一人前でもないのに背伸びして高度な技にしか挑戦しなくなってしまうこと。
ウ　思い上がってしまい、イサムの言葉を素直に聞く気持ちになれなくなること。
エ　イサムへの尊敬の気持ちがなくなり、えらそうな態度をとるようになること。

問三　――線部③「それまでミサエにかけたことがないほどの声が出ていた」とありますが、イサムがそれほどの声を出した理由は何ですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。
ア　一生働いたって返せない、とお金のことを持ち出して悠を追いつめていくミサエを、一刻も早く止めようとしたため。
イ　日頃からミサエの感情的な言い方が気になっており、悠を守るためにミサエの金切り声が絶対に許せなかったため。
ウ　まだ職人になっていない悠がカウンターの中に入っていたのを外に出すために、ミサエの興奮をおさえようとしたため。
エ　一方的に責めるミサエに不信感と怒りを感じ、とにかく悠を守って悠の気持ちを楽にしてやらなければ、と考えたため。

問四　――線部④「イサムはカウンターに入ると、悠の肩をそっと叩いた」とありますが、イサムはどんな気持ちで悠の肩を叩いたと思いますか。イサムの気持ちとして**ふさわしくないもの**を次のア～エからひとつ選び、その記号で答えなさい。
ア　いたわり　　イ　なぐさめ　　ウ　はげまし　　エ　やさしさ

問五　――線部⑤「悠の涙は止まらなかった」とありますが、なぜ涙は止まらなかったのですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。
ア　イサムがかばってくれたことがうれしくて、職人としてこれからも修行に励んでいこうと固く心に誓っていたから。
イ　消え入りそうなほど罪の意識を感じているにも関わらず、その過ちをとがめないイサムの温かさを感じていたから。
ウ　取り返しのつかないことをしてしまったという罪悪感と激しく怒ったミサエに対する恐怖の思いが消えなかったから。
エ　失敗をしただめな自分が今後もこの店で職人としての修行に耐えて頑張っていける自信がなくなってしまったから。

問六　――線部⑥「死んでしまおうか……」とありますが、このときの少年の心情を表す情景表現が本文中に出てきます。その表現を本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問七　――線部⑦「少年は笑い返せなかった」とありますが、少年が笑い返せなかった理由は
一、自分が割ってしまった花壺はもう元にもどすことはできず取り返しがつかないこと
二、家には花壺を弁償するお金はないこと
三、学校にいられなくなるのではと心配していること
などが考えられますが、これ以外の理由をもうひとつ、本文中の表現を使って、「～こと」に続く形で十字以内で答えなさい。

問八　――線部⑧「お母さん、そんなふうにせんでください。……学校にお見え頂くことはありません」という校長先生の言葉は、お母さんと少年にとってどんな意味を持つ言葉だったのですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア　花壷の代金ばかり気にする母親の姿を子どもに見せてはならないという配慮と親子の関係を心配する温かな気持ちのこもった言葉。

イ　校長としての権威を持って母親のつらさを救い、それによって少年の母に対する罪の意識も軽くする威厳とあたたかみのある言葉。

ウ　母親と少年の心に重くのしかかっている罪の意識と心の負担になっているものを全部取り除こうとする、思いやりにあふれた言葉。

エ　教頭が勝手な判断で花壷の値段まで話してしまったことに校長としての責任を感じて、母親の心の負担を軽くしようとする言葉。

問九　――線部⑨「桃治の屋敷に向かう坂道が見えた」とありますが、イサムが桃治の屋敷を訪れるのはなぜですか。その理由がわかる一文を本文中よりぬき出し、初めの三字を書きなさい。

問十　――線部⑩「桃治は電話の向こうでしばらく沈黙していた」とありますが、桃治はどうして沈黙したと思いますか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア　贈った古備前が割れてしまったことのショックの大きさを、イサムに気づかせてはいけないと思ったから。

イ　贋作なのにイサムに申し訳なさを感じさせてどうしようかと戸惑い、なんと言えばいいかと考えたから。

ウ　自分の父がせっかく贈った古備前を割られ、イサムを責めたてたい気持ちを気づかれないようにするため。

エ　せっかく贈った古備前を誰が割ったのかと気になったが、その責任を追及する気持ちを隠そうとしたため。

問十一　――線部⑪「イサムは自分の迂闊さに思わず苦笑いした」とありますが、イサムは自分のどんなところを迂闊だと思ったのですか。十五字以内で自分の言葉で説明しなさい。

問十二　――線部⑫「イサムは古備前の粗相を詫び、修繕の代金の支払いを申し出たが、桃治は笑うだけで相手にしてくれなかった」とありますが、修繕の代金を桃治が受け取らなかったのはその代金が驚くほど高額だったことが理由として考えられます。修繕の代金が高額であったことがわかる部分をこれより前から二十五字以内の一文でぬき出し、初めの三字で答えなさい。

問十三　――線部⑬「春の風が一瞬、イサムの顔をたたいた気がした」とありますが、「春の風」とは何を表していると考えられますか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア　夫人の優しさとやわらかな雰囲気。

イ　夫人の悠へのの思いやりといたわり。

ウ　桃治夫妻のイサムへの優しさと配慮。

エ　桃治のイサムに対する誠意とはげまし。

問十四　――線部⑭「ひょっとしてあの古備前は……」とありますが、イサムは「……」で何と言いたかったのですか。「ひょっとしてあの古備前は」に続く形で、自分の言葉で十字以内で答えなさい。

問題五

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。（問題の都合で本文の一部を変えています）

一九九九年の暮れのことだ。ぼくが主治医を頼まれているダウン症の楽ちゃんが東京のあるアスレティッククラブに入会して、泳がせてもらおうと、付き添いの叔母さんと出かけた。

ところが今どき信じられないことに、クラブから「中学生以上の障害のある人はお断りすることにしている。ダウン症はふだんはおとなしくても突然あばれることがある」といわれ、門前払いされたのである。この原稿を書きながら、この国のあり方に悲しみと、なぜこんな国になってしまったのだろうかと、いきどおりを感じる。

―― 中略 ――

子供たちが次々に想像もつかないような犯罪を起こす時代である。しかし、A ダウン症の子が人を殺したとか、非行に走って、人に暴力をふるったというのは聞いたことがない。B 多くのダウン症の子はおとなしく、音楽が好きで、身体を動かすことを好む。ぼくらの老人保健施設「やすらぎの丘」にも、若いダウン症の娘さんがボランティアに毎日通ってくれているが、実にやさしい。C どんなに忙しいときでも、ゆっくりした自分の仕事のリズムがある。それが、入所しているお年寄りにはたまらない魅力なのだ。

今を生きるぼくらは忙しいために、効率を優先して行動する。効率を優先しないと、結局どこかに迷惑をかけてしまう。①悲しい現実の中で、ぼくらは組織を維持しようとする。しかし、②この構造の中にダウン症の人がひとり入るだけで空気がホーッとするのである。施設を利用しているお年寄りが何よりもそれを肌で感じている。

D ダウン症の子どもは実にあたたかでやさしい。アスレティッククラブの人も、ちょっとダウン症の子とつきあってみればすぐに気がつくことだ。町のなかに開かれたスポーツ施設が、ダウン症の子を差別したとわかれば、大きな問題になるのではないだろうか。

楽ちゃんは今まで実に丁寧に地域で育てられてきた。保育園時代の仲間が応援してくれて、普通学級で小学校の六年間を過ごした。そこでもたくさんの仲間ができた。仲間たちは楽ちゃんをよく支えた。しかし、楽ちゃん以上にすばらしい心のお駄賃をもらったのは、支えた同級生たちではなかっただろうか。楽ちゃんをとおして、生きるってどういうことなのか、人間ってなんだろう、友情とは……数えきれないほどたくさんの心の蓄えができたのではないだろうか。

楽ちゃんの中学の入学式の日は感動的であった。普通学級にするか、特殊学級にするか、親は迷っていた。しかし区立に進学する同級生たちの雰囲気にまぎれ込んで、すっかりその気になっている楽ちゃんを見て、同級生といっしょに普通学級に通わせることに決めた。

入学式の朝、校舎に入るとき、二階の窓から顔を出していた上級生の女の子たちが楽ちゃんを見て、「あっ楽ちゃんだ」といっせいに手を振った。後で聞いたら小学校の先輩たちが、楽ちゃんが入学すると聞いて待っていてくれたのだとわかった。保育園、小学校と地域のなかで育てられた楽ちゃんを支えるネットワークが、もうしっかり中学校につながっていたのである。

楽ちゃんのおばあちゃんには重い痴呆がある。この家にぼくが泊まると、夜中に必ずおばあちゃんが部屋に入ってくる。初めは驚いた。楽ちゃんの布団のずれを直したついでに、寝相の悪

いぼくの布団のずれを直していってくれるのだ。はじめてのとき、だれか、ぼくの布団の中に入ってくるのではないかと思ってギョッとした。

楽ちゃんが赤頭巾ちゃんになり、おばあちゃんが無理やり、オオカミの役をさせられた二人の手作りの芝居を見ていると、③あっ、おばあちゃんは楽ちゃんに支えられているなあとわかる。日本の多くのお母さんがやり続けてきたお世話を、今もおばあちゃんは、楽ちゃんがいることで演じつづけることができている。人間って一方的に支えるなんてありえないことがよくわかった。

④支えたり支えられたりなんだということが、楽ちゃんをとおして理解できた。

楽ちゃんのお父さんは有名な写真家だ。映画監督もしている。彼が『チェルノブイリからの風』という写真集の中で、楽ちゃんと楽ちゃんのお姉さんの游ちゃんへ向けて、こんなことを書いている。

父さんは写真家です。きみたちが生まれるずっと前から、この仕事をしています。美しく、ときにはきびしい大自然、そこで生きる人間やほかのおおくの生きもの、ぼくがなによりも好きな「人間」がつくりあげた町や村の風景、その生活。

父さんは、まずその場所にいき、みて、きいて、感じて、そして写真をとってきました。写真をとろうと決心した若い日のことがおもいだされます。学校を卒業してまもないころ、九州の筑豊の炭鉱で、作家のU先生にであいました。U先生は日本の近代化をささえてきた炭鉱と、そこで生きる人びとの歴史を、文学の世界であらわす仕事をされていたのです。U先生に、ぼくはあこがれました。写真の世界でU先生のような仕事ができたらいいなあ、とつよくおもいました。

U先生はいいました。

⑤「写真をうつすということは、きみがうつしたいものと、きみがどんなつきあいかたができるか、だとおもう」と。

うつしたいものと、まずは、であわなければなりません。であったら、それとどんなつきあいかたができるか。つまり、写真をうつすときにたいせつなのは、性能のいい写真機ではない、それをつかう技術でもないのだということを、教えられたのです。

チェルノブイリへの何度かの旅のあいだ、ずっと考えつづけてきました。チェルノブイリ、チェチェルスクの町や村、そしてそこに住む人たちと、父さんはどんなつきあいかたができるのだろうか……。

はじめて「石棺」の前にたったとき、⑥「ここにはもう二度とくることはない、きたくはない」とおもったのです。けれどもぼくは、もう一度やってきてしまいました。⑦なぜ、またきたのか、游と楽にぜひきいてほしいとおもうのです。

父さんがうつしてきたチェルノブイリの写真を仕事部屋でながめていたときのことです。現像からあがってきたばかりの写真です。

（注）チェルノブイリ・・・一九八六年にウクライナ共和国にあるチェルノブイリ原子力発電所（原発）の四号炉で、大きな爆発事故が起こり、大量の放射能によって広い地域で人も動物も植物も死に絶えてしまった。この文章に出てくる「石棺」とは、高濃度の放射能を閉じ込めるために四号炉をおおった建物のこと。

問五 ――線部⑤「写真をうつすということは、きみがうつしたいものと、きみがどんなつきあいかたができるか、だとおもう」とありますが、チェルノブイリを通して、お父さんはどんなつきあいかたをしていこうとしていますか。それを説明した左の文の空欄にあてはまる一文を本文中よりぬき出して答えなさい。

［　　］という思いを大切にしてつきあっていくこと

問六 ――線部⑥「ここにはもう二度とくることはない、きたくはない」とありますが、そのようにお父さんが思ったのはなぜですか。その理由について書いた文章の空欄に、本文中よりひらがな三字の語をぬき出して答えなさい。

放射能によってすべての［　　］が死に絶えて見えたから

問七 ――線部⑦「なぜ、またきたのか」とありますが、お父さんがチェルノブイリを再びたずねた理由を述べている一文を本文中よりぬき出し、初めの五字で答えなさい。

問八 ――線部⑧「すごくうれしくなりました」とありますが、どうしてうれしくなったのですか。その理由を「～を見たから」に続く形で本文中より一文でぬき出し、初めの三字で答えなさい。

問九 ――線部⑨「ぼくはこれからもチェルノブイリとつきあっていこうとおもいます」とありますが、お父さんがつきあっていこうと思った理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア　チェチェルスクで出会った多くの人との忘れてはならない約束を果たしていこうと思ったから。

イ　自分が一生をかけて取り組んでいこうと思う仕事にチェルノブイリで出会うことができたから。

ウ　自分がチェルノブイリで受け取った感謝の気持ちを游と楽に伝えていかなければと考えたから。

エ　チェルノブイリを通して放射能のおそろしさを游や楽に理解してもらわなければと思ったから。

問十 ――線部⑩「そういうことが、『伝える』ことと『受けとる』ことだとすれば、父さんはそのくりかえしに夢を感じます」とありますが、「夢を感じる」のはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、その記号で答えなさい。

ア　游と楽が父の思いを受け取って、誰かに勇気を与えることのできるような優しい子に育ってくれていると思ったから。

イ　游と楽がチェルノブイリが放射能から立ち直っていけるよう、将来役に立てる人間に育ってくれると考えているから。

ウ　游と楽が父さんの夢を受け継いでその実現に向けて確かに努力していってくれると心から子どもを信じているから。

エ　游と楽が父の思いを受けとり、それをさらに豊かに広げながら次の世代へと受け継いでいってくれると考えているから。

問十一 ――線部⑪「写真家が楽ちゃんをどんなに大切にそだててきたのかがわかる。そして、地域や学校が、今まで楽ちゃんに対してどんなにやさしくしてくれたかがわかる」とありますが、写真家と地域・学校に共通しているのはどういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　楽ちゃんの障害をまったく気にすることなく、普通の人と同じようにその不思議さを愛し大切にしているということ。

イ　楽ちゃんを自分と対等な存在として大切にし、障害を自然に受けいれ温かく包み込むような対応をしていること。

ウ　楽ちゃんの気持ちを最優先で大切にし、楽ちゃんが望んだことはどんなことであろうと実現の努力をしていること。

エ　楽ちゃんの障害はひとつの個性であり、気にするに値しないものであるととらえて対等に付き合おうとしていること。

問十二 ――線部⑫「少なくともアスレティッククラブを運営している人たちの心は健康ではないと感じた」とありますが、「心が健康ではない」とはどういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア　すべてのダウン症の子に対して偏見（へんけん）をもっていて、楽ちゃんの個性を無視しつぶそうとする乱暴さがあること。

イ　ダウン症の子供たちへの差別から、アスレティッククラブ全体で悪意を持って入会させないようにしたこと。

ウ　障害者に対する過度な偏見があり、人間をかけがえのない存在としてみる目がどこにもない冷たさがあること。

エ　障害者に同情はしているが、組織を守るために障害者をよけいなもの、いないほうがいいものとみていること。